第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

男女共同参画と社会

報告書

日 時：2010 年 10 月 7 日（木） 10：00 - 17：30

場 所：独立行政法人 理化学研究所 和光研究所

鈴木梅太郎ホールほか（埼玉県和光市広沢２－１）

目　次

第 8 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムプログラム 1

第 8 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム実行委員会 3

分科会 A　「学会を含むリーダーシップ活動における機会均等」 4

分科会 B　「女性リーダー育成・若手育成分科会」 7

分科会 C　「自分自身のシステムを知る

ー科学が動かす男女共同参画社会を探る」 11

全体会議 I 15

特別講演 I「予測の時代の科学」 17

特別講演 II「これからの科学・技術と男女共同参画」 19

ポスターセッション 21

全体会議 II 23

パネルディスカッション　「男女共同参画のこれから」

各種報告 29

第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

【日 時】 2010 年 10 月 7 日（木） 10：00 - 17：30
【場 所】 独立行政法人 理化学研究所 和光研究所　鈴木梅太郎ホールほか
（埼玉県和光市広沢２－１）
【テーマ】「男女共同参画と社会」
【主 催】 男女共同参画学協会連絡会
【共 催】 独立行政法人理化学研究所
【後 援】 文部科学省，日本学術会議，科学技術振興機構、内閣府男女共同参画局

◆プログラム◆

受付（9:30 - ）　【広沢クラブ】

午前の部（10:00 - 11:45）
分科会Ａ【鈴木梅太郎ホール】
テーマ：学会を含むリーダーシップ活動の機会均等
世話役：本間美和子氏（日本分子生物学会･福島県立医科大学）

分科会Ｂ【統合支援施設２階大会議室】
テーマ：女性リーダー育成・若手育成
世話役：高井まどか氏（応用物理学会･東京大学）

分科会Ｃ【生物科学研究棟３階大会議室】
テーマ：自分自身のシステムを知る－科学が動かす男女共同参画社会を探る
世話役：跡見順子氏（日本宇宙生物学会･東京大学）
富田-横谷香織氏（日本宇宙生物学会･筑波大学）

午後の部（13:00-17:30）
全体会議Ⅰ（13:00-14:50）【鈴木梅太郎ホール】
司 会：松尾由賀利氏（日本物理学会・理化学研究所）

13:00
主催者挨拶：栗原和枝氏（高分子学会・東北大学）
来賓挨拶　：合田隆史氏（文部科学省 科学技術・学術政策局 局長）
来賓挨拶　：岡島敦子氏（内閣府 男女共同参画局 局長）
歓迎の辞　：大熊健司氏（理化学研究所 横浜研究所所長）

13:30-14:10
特別講演 I
司 会：高原 淳氏（高分子学会・九州大学）
講演者：茅 幸二氏
（理化学研究所 次世代スーパーコンピュータ開発実施本部 副本部長）
「予測の時代の科学」

14:10-14:50
特別講演 II
司 会：栗原和枝氏（高分子学会・東北大学）
講演者：相澤益男氏（総合科学技術会議 議員）
「これからの科学・技術と男女共同参画」

ポスターセッション （14:50-15:50） 【生物科学研究棟２・３階ホール】

全体会議 II（15:50-17:30）【鈴木梅太郎ホール】
司 会：前田瑞夫氏（高分子学会・理化学研究所）

15:50-17:00
パネルディスカッション「男女共同参画のこれから」
パネリスト：各分科会代表世話人ほか

17:00-17:30
各種報告
連絡会活動報告：吉江尚子氏（高分子学会・東京大学）
新規加盟学会紹介：新規加盟学会代表者
次期連絡会委員長挨拶

閉会の辞：高原 淳氏（高分子学会・九州大学）

懇親会（18:00-20:00）【広沢クラブ】
司 会：中山榮子氏（日本女性科学者の会・昭和女子大学）

第8回シンポジウム実行委員会

実行委員長	栗原　和枝	高分子学会・東北大学
	高原　　淳	高分子学会・九州大学
	吉江　尚子	高分子学会・東京大学
	前田　瑞夫	高分子学会・理化学研究所　（現地実行委員長）
	佐々木　園	高分子学会・京都工芸繊維大学
	田辺　恒彰	高分子学会・旭化成イーマテリアルズ
	成田麻美子	高分子学会・(株)豊田中央研究所
	新倉　謙一	高分子学会・北海道大学
	華房　実保	高分子学会・(株)三菱ケミカルホールディングス
	上田　一恵	高分子学会・ユニチカ(株)
	野崎　京子	高分子学会・東京大学
	三原　隆志	高分子学会
	高井まどか	応用物理学会・東京大学
	本間美和子	日本分子生物学会・福島県立医科大学
	本橋　令子	日本植物生理学会・静岡大学
	原田　慶恵	日本生物物理学会・京都大学
	松尾由賀利	日本物理学会・理化学研究所
	中山　榮子	日本女性科学者の会・昭和女子大学
	吉原美知子	日本金属学会，日本鉄鋼協会・横浜国立大学
	江川紀美子	日本建築学会・日本女子大学
	吉宗　美紀	化学工学会・産業総合研究所
	跡見　順子	日本宇宙生物科学会・東京大学
	富田-横谷香織	日本宇宙生物科学会，生態工学会・筑波大学
	光武亜代理	日本蛋白質科学会・慶應義塾大学
	高橋　　文	日本遺伝学会・国立遺伝学研究所
	丸田　夏子	日本分子生物学会
	福田　　博	日本分子生物学会
	谷　　由美	理化学研究所　（現地実行委員）
	中尾　愛子	高分子学会・理化学研究所　（現地実行委員）
	藤田　雅弘	高分子学会・理化学研究所　（現地実行委員）

分科会 A　「学会を含むリーダーシップ活動における機会均等」

世話役：本間　美和子氏（日本分子生物学会・福島県立医科大学）
　　本橋　令子氏　（日本植物生物学会・静岡大学）

分科会 A では、「学会を含むリーダーシップ活動における機会均等」と題し、「リーダーシップ」という観点から女性リーダーをどのように育て、visible にするかという目標に向かう方策について大坪　久子氏（日本大学　総合科学研究所）と 4 名から話題を提供いただき、積極的な質疑応答が交わされた。

１．大坪　久子氏（日本大学　総合科学研究所）　開催挨拶
２．吉田　聡子氏（理化学研究所）「属性調査データ・中間発表」
３．丸田　夏子氏、福田　博氏（日本分子生物学会事務局）「プロトコールに基づく属性調査実施の立場から」
４．末岡　多美子氏（元コロラド大学教授）「学会活動におけるリーダーシップ」
５．久保　真季氏（国立女性教育会館　理事）「リーダーシップに関する国内外の実践例と今後の展望」

まず、大坪氏から、開催挨拶とともに以下のような指摘がなされ、分科会 A のスタートとなった。2007 年に学協会においてアンケート調査を行なったところ、どのような研究者になりたいかという設問において大学において研究リーダー（PI）としてという回答は女性が少なかったのに対し、PI ではないが大学で働きたいと回答したのは、女性が男性の倍であった。基盤整備として両立支援をすると同時に、女性自身の啓発活動も必要である。女性自身が持っている気がつかないバイアスがあると考えられ、新しい一歩を踏み出すために、学会に何が出来るのかを考えていく必要がある。

理化学研究所の吉田氏からは、2009 年の日本分子生物学会年会演題登録時に始まった属性調査および、日本植物生理学会、日本神経科学学会、日本発生生物学会、日本遺伝学会等における女性研究者比率や演題発表についての基礎データの分析より、学会でのリーダー活動における見えないバイアスやバリアがあるかという考察についての発表が行なわれた。属性調査から以下のことが明らかとなった。

・演題発表者の女性比率に比べて、シンポジウムオーガナイザーや座長などリーダー的な立場にある女性の比率が低い
・発生生物学会では、国際合同学会において、シンポジウム発表者の女性比率は国内学会よりも高い。学際の国際化が女性比率に影響を及ぼす可能性がある。
・日本植物生理学会の例より学会賞や奨励賞は女性審査員がいると女性受賞者が選ばれやすい傾向があるのではないかと考えられる。

・日本生物学会の例より女性オーガナイザーがいると女性シンポジウム発表者が選ばれやすい傾向があるのではないかと考えられる。

これらの属性調査より、女性が選ぶ側にいないことによって女性が選ばれにくくなるという無意識のバイアスがあることが分かった。属性調査には、バイアスの有無が明らかにできるという意味がある。女性の visibility をあげることが女性リーダーの育成につながることが報告された。

質疑応答では、賞の審査員などをどのような基準で決めているかも重要なことである、アメリカでは女性であることの意識が強く、女性で何かしようという動きがあるが、それは日本と違う点なのではないかといった意見交換がなされた。

日本分子生物学会事務局の丸田氏、福田氏からは、分子生物学会の年会における演題投稿者の属性調査の導入から集計までの具体的な内容について報告があった。調査の実施スケジュールや実施にあたり注意した事項として、個人情報の保護のため回答は任意、設問によっては回答しないことを可とし、目的の明文化を徹底したこと、少しでも簡単に回答できるように設問を少なくし選択式としたことなどが報告された。スムーズに実施できた理由として、年会準備のトップと、実際に実務を担当される年会準備会議の先生方の両方から承認が得られたことなどが上げられた。

元コロラド大学教授　末岡氏からは、アメリカの学会内の活動の模様について報告がされた。職階と女性の割合は、職階が上がる毎に比率が段々落ちるという特徴がある。女性比率が、学生では 50%であったのが、ポスドクでは 44%、助教 36%、教授（トップ 50 大学）15%と段々女性比率が下がっており、底辺を上げることが必要である。また、企画委員の男女比が演者の男女比に影響することが分かっている。女性リーダーの育成のためには、1.科学を選ぶ女性数を増やす 2.リーダーの素質を持つ女性数を増やすことが重要である。数学的能力は男女において差が無いことが証明されており、アメリカでは子どもも認識している。日本においても家庭や教育における意識を変革する必要があるのではないか。リーダーの育成については、学内でリーダーを育てること、また学会でリーダーを増やすこと、その両方で行っていくことが必要である。なるべく女性などマイノリティを雇うというアドバンスプログラムの結果、段々と効果が現れたことが報告された。アメリカの学会では、女性だから女性でやっていこうという考え方が強く、学会内での女性リーダーの育成として、女性会員のデータベースを整える、リーダーの素質を持つ人を選び出す、選挙にポジティブに働きかける、優れた女性会員を学会賞に推薦する、女性支部からの賞を出す、女性会員の相互扶助をするということがなされていることが、Round table discussion などの具体的な事例と共に報告がされ、学会活動で認められ学会活動を盛り上げることが学内での立場を築くことにつながるのではないかとまとめられた。

質疑応答ではアメリカの Round table discussion についてその方法などの質疑があり、女性の支援として日本の学会でも行うと良いのではといった意見が出された。

国立女性教育会館理事　久保氏からは、アメリカの研究機関の実践例や米国アカデミーの提言

とともに、国立女性教育会館が共催した 2010 年 7 月の女性研究者のエンパワーメントと新領域創成に向けた日米シンポジウムについて紹介があった。日本では一般の雇用者に比べても研究者の女性比率が少なく、どう増やしていくか、特に教授レベルまでいかに増やしていくかが問題である。アメリカでは 1986 年に大学学長の女性割合が４％であったのが、2006 年には 14%に増加している。アメリカでは 20 年の歴史があるのに対し日本では対策を始めてやっと 5 年だが、すでに政府の中で不要だという声が多い。ともするとライフワークバランスになってしまうが、女性研究者支援策の成果を見せていくことが重要である。また、米国ナショナルアカデミーの報告書では人材を育成しないことは国力を阻害するという国の考え方がはっきり出ていることが紹介された。

さらに、日米シンポジウムを米国科学財団と共催し、女性研究者の国際的ネットワークの構築を図ったことが紹介された。日本の場合、シンポジウムはオープンにするが、アメリカが求めたのは、このシンポジウムでどういう効果があるかを具体的に考え、クローズドにし参加者のネットワーク構築を目的とした。分科会では 3 日間食事も含め共に過ごしディスカッションを行なったため、参加者達は非常に親しくなりネットワークが構築された。そのシンポジウムでアメリカ側から日本は研究者が見えない、さらに女性研究者が見えないという意見があり、女性研究者を見せるためのデータベースを構築するなどの試みがあっても良いのではないかという意見があったことが報告された。最後に米国ナショナルアカデミーによる Scientific and Professional Societies への提言が以下のように紹介された。

・基準作成、データ収集、研修実施（男女問わず研修をする必要がある）
・講演者を会員の多様性の反映する構成にすべきである
・重要なリーダー職に女性を登用すべきではないか
・賞やリーダー職を通じて女性の科学、技術への貢献を浸透させる
・育児・介護ケアのための資金提供によって、女性が参加しやすくする

データをベースにした議論をして女性研究者の研究力がどれだけあがったかを示していく必要があると思っている。また、ライフワークバランスに加えてリーダー育成についても考え、強化していく必要がある。

質疑応答では、女性の登用で、限られた小数の人に負担がかかり本来の研究の阻害にもなるのではないかという考え方もあるが、負担になることが確かかもしれないがまた新たなネットワークの構築になるというプラス面も考えて欲しいと意見交換がなされた。その他、日米シンポジウムも今後も続けて欲しいが参加者を公募にするなどチャンスを均等にして欲しいという意見や、女性研究者の支援について国の予算が出なくなる件に関し意見が出され、ライフワークバランスでは一般と同じであるのでエンパワーメントで考える方が良いとのコメントをいただいた。

（記録：日本建築学会　江川紀美子）

分科会 B　「女性リーダー育成・若手育成分科会」

司　会：高井まどか氏（応用物理学会・東京大学大学院工学系研究科）

ラウンドテーブルミーティグ形式で、「女性リーダー育成」について討論を行った。所属、年齢に偏りなく、産業界、大学、研究所、さらに若手からシニアの方々まで多くの方々に参加頂いた。参加者は総勢 52 名であった。

まず、司会者より分化会 B の趣旨説明がなされた後、話題提供者からリーダーとして自覚をもったきっかけ、理想とするリーダー像など 5 分程度にまとめて話を頂いた。その後、参加者と意見交換を行いリーダー育成の具体策を議論した。

趣旨

- リーダーの言葉の持つ多様性を探り、より多くのリーダーモデルを作り出すことを目指す
- 個々人のパワーアップをはかり、新しいリーダー像を描く具体策を提案することを目的とする。

話題提供者

美濃島　薫　氏
産業技術総合研究所　計測標準研究部門 長さ計測科 長さ標準研究室 室長　応用物理学会
御手洗　容子　氏
物質・材料研究機構　環境・エネルギー材料萌芽ラボ　白金族金属研究グループ グループリーダー　金属学会
松尾　由賀利　氏
独立行政法人理化学研究所・先任研究員　物理学会、男女共同参画推進委員会　第64‐65期　委員長
野呂　知加子　氏
日本大学、生産工学部、応用分子化学科　准教授 日本発生生物学会
小川　賀代　氏
日本女子大学　理学部数物科学科　准教授　電子 情報通信学会
荒川　薫　氏
明治大学理工学部情報科学科　教授　電子 情報通信学会
永合　由美子　氏
東京大学　工学系研究科/工学部 広報室　化学工学会
五明　明子　氏
ＮＥＣ人事部　キャリアアドバイザ　応用物理学会
金田 千穂子　氏
富士通研究所　基盤技術研究所主管研究員（兼）富士通　アプリケーション開発統括部長付、大阪大学　特任教授　応用物理学会

話題提供者から頂いた意見

美濃島　氏

　他人の人生を背負った瞬間、その時に自覚を持った。研究はやりたい所から発するものであるが、運営とは人の人生をオーソライズされて背負うものであると感じた。重要なのは覚悟を持つこと、覚悟の根拠たる自信を養ういろいろな経験を自分の中に蓄積しておくことが重要ではないかと考えている。

御手洗　氏

リーダーを目指すきっかけは学協会連絡会の大規模アンケートで、女性は男性よりも圧倒的に予算が少ないことを知ったとき。大きな予算や役職は研究を進めていく上で大事であるため、大型予算を獲得することと、役職に就くことが大事と感じている。

松尾　氏

意識するきっかけは、応物学会の男女共同参画委員会活動。リーダーに必要なことは、良いものと悪いものを見分ける力、先を見通す力。リーダー育成のためには、キャリアの初期段階に小規模でもよいのでリーダー役につくというきっかけが重要である。（女性は幼少期からリーダーシップをとる機会が少ない。（するべきでないという刷り込みみたいなものがあるのでは）

野呂　氏

メンターに恵まれたことから、独立独歩の環境が自分を育てた。マネージメントを若い時から無理矢理でもやることが大事である。リーダーに求められるは、俯瞰的に物事を見ること、気遣うこと、決断して責任をとること、である。

小川　氏

リーダーの自覚のきっかけは、学生の卒業論文の指導教員として初めて自分の名前を見たこと。リーダーに求められることは、ロールモデルになること、と責任を取ってもらえるという安心感を与えることである。

荒川　氏

自分の好きな研究をやりたいという気持ちで続けてきて、現在がある。後ろから押されて前を向いて走ったという感じ。役割を与えれば自覚が出来てリーダーに育つ。

永合　氏

㈱ライオンで 24 年間商品開発に携わった。女性研究者は、入社時は優秀だがその後は伸びない、とよく言われるが、「場」が与えられないことが原因だと考える。「場」を女性がとるためには、リーダー側が「与える」ことも必要ではないか。

五明　氏

研究者としての自覚は、主たるテーマを与えられたとき。先の目標を立て、成功体験を積み上げつつ、モチベーションを高めていくことが重要。視点の転換で非常にいろいろなものが見えてくる。ある程度のプレッシャーによりリーダーを自覚させることも必要。

金田　氏

リーダーの自覚を持ったのは、部下に若い人がつき、研究の価値を会社の上に伝える責任を感

じたとき。リーダーに必要なことは、目先にとらわれずに「遠くの方」「夢」を見ることと、ムードメーカーの役割もあるので、くさらないこと、あきらめないこと、めげないこと、が重要。

以上の意見をふまえて、日本物理学会　高山　一氏から
「女性リーダーであるがゆえの問題」とはどのようなものか。
「男性リーダーとの違い」が知りたい。
という意見があった。これに対して以下のような意見があがった。

・ 子育て期間中では、時間外「飲みニケーション」ができないこと。
・ 女性が仕事などで失敗すると、少数派であるがゆえに、「女性」だからという批判の対象にされる点。
・ 「委員長は男子、副委員長は女子」というような認識。

このような意見に対し、応用物理学会人材育成・男女共同参画委員長小舘香椎子氏（日本女子大名誉教授）より、日本において女性リーダーが少ないこと、リーダーを増やすためには、人事権をもった現在のリーダーが、人事権をもつ女性リーダーを増やすシステム改革を行うことが必要。中国においても、女性研究者は 40%もいるが、本当のトップには女性がつけていないことが問題になっているという紹介があった。

そのほか、女性リーダーが少ない現状が以下のように分析された。

理化学研究所の大熊　健司理事

女性がリーダーとして育つためには、働き方の多様性を受け入れる体制がシステムとして必要ではないか

文科省の永田　一穂氏

母数が増えても、リーダーになりたくてもなれないという現実がある。それは、結婚、出産、育児に時間がとられ、深夜労働できないということがあるかもしれない。

JST 安田　絵美氏

評価者に女性研究者が少ないという問題がある。さまざまな審査について、同じ人に何度もお願いしているという現状がある。負のスパイラルの解消が大事であろう。

女性リーダーを増やすための対策については、小舘氏より、
国際的に活躍することがリーダーとして求められているが、海外から、日本の女性研究者が見えにくい。女性研究者の全国マップを作成し、「見える化」を図るという案がだされた。

応用物理学会の遠山　嘉一氏より、影響力の大きい高名な女性研究者が男女共同参画に積極的でないという問題もあるのでは、という指摘があり、五明氏より、男女共同参画の必要性をより積極的に説明していく必要があるのでは、という意見があがった。小舘氏からも、さまざまな場で、意見交換を活発にしていくことがこれからも必要であるとまとめられた。

　最後、司会者より、東京大学で実施された男女共同参画のアンケートで、女子学生から進路を相談する相手がいないので、女性教員を増やしてほしいと言われていることが紹介され、女性リーダーが必要とされている現状が紹介された。

以上

（文責：高井まどか　応用物理学会）

本原稿をまとめるにあたり、理化学研究所　前田バイオ工学研究室の宝田研究員、平野研究員、日本女子大の駒井助教、応用物理学会事務局の伊藤様、森様、にご協力いただきました。感謝申し上げます。

分科会Ｃ「自分自身のシステムを知る
－科学が動かす男女共同参画社会を探る」

世話役：跡見順子氏（日本宇宙生物科学会･東京大学）
富田-横谷 香織氏（日本宇宙生物科学会･筑波大学）

プログラム

１）プロローグ（男女共同社会のこれまでとこれから）
企画挨拶　跡見 順子氏（東京大学）

２）生物の差と人間の男女－科学的見地から健康に働くことができるしくみを探る
富田-横谷 香織氏（筑波大学）

３）自分自身のシステムを知ろう－理系研究者に期待すること
跡見 順子氏（東京大学）

４）直木賞作家・篠田節子氏と「女性の一生と身体」を語る（座談会形式）
登壇者の紹介
パネルディスカッション参加者：篠田 節子氏・跡見 順子氏（東京大学）・
富田-横谷 香織氏（筑波大学）・清水 美穂氏（東京大学）

５）まとめ

１）プロローグ（男女共同社会のこれまでとこれから）
企画挨拶　跡見 順子氏（東京大学）

まず、日本宇宙生物科学会は生物科学の様々な分野を包括し地球上における人間のからだと生活について、地球の重力を中心に、無重力環境である宇宙を研究の場として活動している学会であるという紹介があった。この分科会は、これまで行われてきた男女共同参画の取り組みが、十分にその役割を果たす軌道に乗り、これからも大きな発展を期待しつつ、我々理科・技術に携わる研究者だからこそできる切り口を探るために、“健康に働くことを科学する”WGの活動の一環として企画された。また、直木賞作家・篠田節子氏を交えて、女性の生き方について座談会方式で議論するという企画を紹介された。

この分科会を発足した背景として、これまでの男女共同社会の考え方の違いや女性の身体のシステムはより複雑であるために、女性の身体のシステムの研究が始められたのが遅かったことなどが挙げられ、男女の生物学的なシステムの差について、関連する情報や知識を互いに世代を超えて認識することでこれからの男女共同社会を発展させることができるのではないかという意見を述べられた。

２）生物の差と人間の男女－科学的見地から健康に働くことができるしくみを探る
富田-横谷 香織氏（筑波大学）

本講演では、10 年ほど前から男女共同参画活動に参加してきた経験を踏まえて、生物学的な男女の違いや健康について科学的見地からのアプローチをすることで、これからの男女共同社会に向けた提案をしたいと述べられた。まず、植物の防御システムのしくみを例示し、植物においても複雑なシステムが機能していることが十分に研究・利用されているように、生物としての人間の男女差を理解し、活用していくことが必要だと述べられた。男女共同参画においては、ポジティブアクションが行われているが、世代の違いが感じられており、世代・男女に関わらず互いに違いを知る事が重要で、そのような場を持つ機会が必要であると指摘された。そして、人間の知恵を下の世代に継承し、固定観念を除くことも、さまざまな世代・男女が健康に働くためには重要だと強調された。

３）自分自身のシステムを知ろう－理系研究者に期待すること

跡見 順子氏（東京大学）

まず、この講演の背景として、自分自身のシステムを知らずに生きるのは不健康であるのに、現代社会ではそれが欠如している人が多いこと、生物である人間を基本から考える分野がないことなどについて言及、さらに駒場での 25 年間の研究・教育*注を通じて科学的な視点から自分というシステムを知るということが、これからの男女共同社会を考える上で新しい切り口になると考えていると述べられた。これに関連して、自身が取り組んでおられる生物科学の視点から人間の健康を考えるための教育プログラムの概要とその効果について紹介された。これからの男女共同社会の発展のために理系研究者に期待することとして、とくに女性は、「産む身体のしくみをひきうけるようにからだがつくられていること」で、身体と科学的に向き合うことが重要であり、またそれ故、様々な点で繊細につくられていることが多いなどの側面を持っているので、それをより活かせる方向での理系の教育が、女性の能力をさらに引き出すであろうと考えられるので、人間基盤科学という新しい分野を構築し、科学技術の力で人間のシステムの理解を深めることを挙げられた。

注：跡見先生は、東京大学教養学部のある駒場キャンパスで３千人の新入生対象の体育必修授業を担当されていた。

４）直木賞作家・篠田節子氏と「女性の一生と身体」を語る（座談会形式）

登壇者の紹介

パネルディスカッション参加者：篠田 節子氏・跡見 順子氏（東京大学）・

富田-横谷 香織氏（筑波大学）・清水 美穂氏（東京大学）

最初に篠田氏のプロフィール紹介があり、「女性の一生と身体」について講演をいただいた。

『人を身体と精神の二元論で捕らえ、身体を精神の下位に置く文化の下では、月経、出産など客観的に見える身体情報が多い女性が、より動物に近いものと見なされ、劣位に置かれてきた。（たとえば多くの宗教で、その教義にかかわらず、現実の場面で露骨な男女差別が存在する）し

かし人間と世界をトータルに捕らえようとしたとき、一生を通じて自らの身体情報に向きあわざるを得ない女性の感覚は、たいへんに有利に働くのではないか？

一方で、たとえば文学の世界では、性交渉（恋愛も含む）や妊娠・出産だけが女性性と捕らえられ、珍重され、女性がそれを描き出せば評価され、その他の分野では認められにくいという傾向もある。少子高齢化に対する政策においても、しばしばそうした視点が混入し、男女共同参画への逆風となっている。そうした意味でも身体のシステムをトータルに知るという今回の取り組みは非常に有意義なものであり、疑似科学と偏見によって多くの誤った情報が流される昨今、科学と一般の人々を繋ぐ仲介者としての女性研究者による活躍も大いに期待したい。』（篠田様に書いていただいた文章をそのまま掲載）

講演後、篠田氏・跡見氏・富田氏・清水氏によるパネルディスカッションが行われた。まず、跡見氏より女性の身体の研究はこれまでほとんど行われておらず、自分の身体に関心を持たなくなってきていることが問題で、きちんと科学的に知る事が重要であるとのコメントがあった。また、政策面などにおいて社会的通念で通される事をなくすためにも、科学的裏付けが大事だと強調された。次に、富田氏より知恵の継承とは、全世代が働いて社会に貢献することが前提で、職場の仕事の引き継ぎのような感覚で、いろいろな人が繋がっていくことであるという補足があった。これに関して、清水氏より北大では女性の院生の会や教員の会があり、相談できる女性が近くにいると安心できたが、横のつながりを作る機会が最近は減ってきており、女性同士のコミュニケーションが大事であるとのコメントがあった。篠田氏より、女性の身体の問題、職場における女性のありかたの問題（職場にロールモデルがいない）があるのではという指摘があり、ポジティブアクションについて世代的な問題があることや、女性自身にもモデルになろうとする意欲が少ないことなどが議論された。富田氏より、いいサイエンスをすることが、結果的に女性の地位の向上につながるのではというコメントがあった。

質疑応答においては、会場からどうやったら女性研究者の数を増やす事ができるか？という質問があった。これに対して、小さいうちからの教育が大事、現場が満足できるような政策・サポート体制が重要である等の意見が挙げられた。この他に、この分科会のアプローチは非常に新しくて期待もしているが、生物系とは離れた分野（特に産業界や工学系）から理解が得られるのか？という意見があった。これに対して跡見氏は、日本的な風土も考慮しつつ、まずはサイエンスから始めていくことが、お互いの理解に必要であると述べられた。

５）まとめ

最後に、富田氏よりこの分科会の取り組みはまだ始めたばかりであるので、これからの男女共同社会の発展のためにどのような貢献ができるか模索しつつ育てていきたいと決意を述べられ、閉会となった。

（記録：化学工学会 吉宗美紀）

全体会議Ⅰ

司　会：松尾由賀利氏（日本物理学会・理化学研究所）

【主催者挨拶】：栗原和枝氏（高分子学会・東北大学）

第 8 期男女共同参画学協会連絡会の委員長であり、本シンポジウムの実行委員長である栗原和枝氏から挨拶があった。

（趣旨）昨日、日本人２名のノーベル化学賞受賞の報があり、とても晴れがましい気持ちで、本日のシンポジウムを迎えることができ、非常に喜ばしい。第 8 期の活動として、全学協会の賛同が得られなければならないという厳しい条件にもかかわらず、第 4 期科学技術基本計画の作成に間に合うように、連絡会として異例の速さで二つの要望書をとりまとめ、関係機関に要望書を提出することができた。また、新たに連絡会内に、男女共同参画に関係する課題を議論するためのいくつかのワーキンググループを立ち上げ、その活動成果を本シンポジウムの分科会とパネルディスカッション、ポスター発表等紹介することができた。男女を問わず、個人個人が能力を発揮することができる社会を作ることは、我が国がより活力ある国となるために重要であり、本連絡会の大事さを改めて認識した。

【来賓挨拶】：合田隆史氏（文部科学省 科学技術・学術政策局長）

（趣旨）日本の未来を切り拓いていくためには、科学技術が非常に重要である。科学技術を発展させるためには、人材の裾野の拡大、人材の確保が非常に大事である。しかしながら現在、博士号取得者の活躍の場がきちんと整備されていない状況にある。これは、日本の将来にとって死活問題である。特に、我が国は女性の研究者の割合が少なく、欧米諸国と比べ、著しく低いレベル。そのため、文部科学省では、女子中高生の理系進路選択支援、女性研究者の研究と出産・育児の両立や、その能力を十分に発揮しつつ、研究活動を行えるシステム構築を支援する女性研究者支援モデル育成などの事業をやってきたが、大学の人事に直接介入することはできないので、女性研究者数を飛躍的に増加させるというような成果には至っていない。現在、女性研究者支援のための新規事業の予算要求を行っている。若手研究者の新規採用が難しいなかで、若手研究者支援を含めて、女性研究者の支援を考えて行かなければいけないと考えている。

【来賓挨拶】：岡島敦子氏（内閣府男女共同参画局　局長）

代理　武川恵子氏（内閣府大臣官房審議官）

岡島敦子氏が補正予算関係のお仕事でご欠席のため、代理として内閣府大臣官房審議官の武川恵子氏よりご挨拶いただいた。

（趣旨）今年は、日本が APEC 議長国の年であり、今後の経済成長には、女性の潜在能力を活用することが重要であることがテーマの１つになっている。これからの少子高齢化社会では、国力の源である科学を発展させるために、女性の力をうまく活用することが非常に重要である。内閣

府では板東前局長の時代から女性の医師、女性公務員、女性研究者の支援に力を入れてきた。この十数年の間に我が国の男女共同参画は確実に進んできたが、他国の進む速度がより速いため、残念ながら国際的には遅れてしまっている。そこで、我が国でももっと男女共同参画を加速していかなければいけない。そのような意味で、男女共同参画学協会連絡会の活動に期待している。本日の会が有意義な機会になることを祈念している。

【歓迎の辞】：大熊健司氏（理化学研究所 横浜研究所所長）
本シンポジウムの会場である理化学研究所で、これまで男女共同参画に取り組んで来られた、大熊健司理化学研究所横浜研究所所長より歓迎の言葉をいただいた。
（趣旨）みなさまに歓迎の辞を申し上げたい。まず主催者代表の栗原委員長に理化学研究所を本シンポジウムの会場に選んでいただいたことに感謝する。文部科学省合田局長、内閣府武川審議官にお礼を申し上げる。５年前、この会場で理化学研究所の男女共同参画シンポジウムを行った。そのシンポジウムにたまたま出席し、女性研究者の問題を肌身にしみて認識した。平成１８年、１９年に科学技術振興調整費に応募したが、残念ながら採択されなかった。その後、理化学研究所も男女共同参画に力を入れてきた。仕事の継続を困難にする要因は個人個人異なるので、「個別支援コーディネーター」が職員からの相談を随時受け付け、問題を解決していくというシステムを２００７年から導入した。妊娠、育児中の研究系職員に支援者を配置する制度は、現在年間６０人を超える職員が利用、男性利用者も出てきた。また、理化学研究所では事業所内に託児所を設けた。今後、男女共同参画には男性の意識だけではなく、女性の意識、組織の意識改革が必要であると考えている。また、コミュニケーションや情報の共有化も大事である。資料集のワーキンググループ活動報告にもあるように、仕事と家庭生活のアンバランスが問題であり、これからはワークライフバランスの問題に真剣に取り組むことこそ、男女共同参画の本質ではないか。

特別講演Ⅰ

司　会：高原　淳氏（高分子学会・九州大学）

講演者：茅　幸二氏　（理化学研究所・次世代スーパーコンピュータ開発実施本部・副本部長）

「予測の時代の科学」

現在理化学研究所は、研究所を懸けて次世代スーパーコンピュータの開発を行っている。そこで、本日は次世代スーパーコンピュータについて、皆さんのご理解をいただくためにお話をする。まず始めに、残念ながらスーパーコンピュータの開発に関わっている研究者にほとんど女性がいない。一方、理化学研究所のキャンパスには多くの女性がいる。重要なことは、ものの見方に多様性がある人の集団でなければできないことがあるということで、そのようなことから、男女共同参画が重要である。私は国立大学の講座制に疑問を抱き 1981 年から慶応義塾大学理工学部化学科の創設に伴い着任し、18 年間教育と研究に没頭した。1999 年に慶応義塾大学を離れ、国立共同利用研究機関である「分子科学研究所」（岡崎市）に着任し、5 年を過ごした。その際、国家計算機プロジェクト[NAREGI]の研究拠点として 2003 年に分子科学研究所にスーパーコンピュータを導入した。それ以降、スーパーコンピュータには因縁が生じた。現在行っているペタコンプロジェクトの目標は世界最速の計算機であることと、21 世紀という「予測の時代」における計算科学という分野の重要性をペタコン応用から実証し、さらなる発展をさまざまな分野の連携・融合から創り出すことである。京コンピューターは半世紀前のパラメトロン計算機の 1 万倍の電力で 10 兆倍の速度で計算を行うことができる。パラメトロン計算機と京（けい）コンピューターは、素子数と細胞数の比較対応から、この半世紀で線虫から人間に進化したといえる。空間、時間のすべてにおいて実在する極大から極小の世界を、部品でなく、システムとして計算機で再現するのが目標である。たとえば、すべての自然現象はそれを支配する法則によって決定されている。そして、現象をモデル化することによって、その現象を数学的に表現する方程式を得ることができる。したがって、その方程式の解が求まれば、その自然現象を理解できたことになる。ただし多くの場合、そのような方程式はそのままでは解けない。そこで方程式を近似して、連立一次方程式の形に落とし込む。ここまでくれば、あとは四則演算を実行するだけである。空間、時間スケールが違う世界を記述する式に差異はあるが、基本的な共通点がある。それはすべての性質、特性が系を構成する多数の要素の間の相互関係（相互作用あるいは相関）によって決定されるという点である。しかも、これらの相互作用（相関）の有様が測定できるようになった結果として、情報量が膨大となり、いままでのような直感と経験だけでは、問題は解明されず、計算機が必須となる。今後の 5 年間で計算機での予測が重要な役割をする戦略 5 分野は、1. 予測する生命科学・医療および創薬基盤、2. 新物質・エネルギー創成、3. 防災・減災に資する地球変動予測、4. 次世代ものづくり、5. 物質と宇宙の起源と構造である。地球環境のみならず、あらゆる分野で、情報量が爆発的に増大している。生命科学におけるゲノム解析データーはその一例である。近い将来、個人の遺伝子解析が 10 万円以下でできる時代が到来し、各人の遺伝子の特有部分を取り出し、

その人の体質や特有の病気のかかり易さなどが予測できるようになる。その基盤作りのための計算は厖大で、ペタコン応用の大きなターゲットである。そして、得られた情報から各人に適合した薬品の配合・治療などが可能になる。計算機でデザインし、個人個人の体質に適合した医薬品を、適量に効率よく摂取し、健康で長寿を全うする日が近づいている。また、上記５分野共通の大きな課題は、要素の科学からシステムの科学へということである。いままでは、自然のなかにある整然とした秩序（例えば、固体結晶、原子・分子の集合）から物質や装置（計算機など）を作り上げた。これからは、部品だけでなく、システム全体を設計し作りあげる。さらには、自然がもつ一見無秩序な世界にある秩序を律する法則を見つけ出す（生命体、社会など）。このように計算機はさまざまな予測を行い、21 世紀の社会へ貢献するであろう。しかし、たとえ「計算機で経済問題が予測できる時代」が到来することはあっても、一番重要な問題は「世界全体としての生き様、多様性のある調和」のあり方で、上記の問題には「人類の叡智」を注がねばならない。もし、人類としての「世界平和モデル」が構築できれば、計算機は充分にその具体的内容を算出できるはずであり、やはり「人類の平和に向けた叡智！！」こそ、求められるべきである。２０世紀では科学・技術は豊かな物質創製を目指した部品の科学・技術であった。２１世紀の科学は「システムの科学」である。複雑な部品の組み合わせを、総合的に理解し、「新しい物質観」「新しい生命観」「新しい世界観」を生み出す時代の科学である。コンピューターは、一見「道具」に過ぎないが、巨大コンピューターの誕生により、素粒子から宇宙までの空間を、共通の理念で理解する可能性を秘めている。このためには、自然科学と人文・社会科学の連携、つまり本来の「科学」への回帰が必要かもしれない。

「Science research is like saving, if postponed until needed, it is too late to start.」

（アラバマ州立大学 Von Braun 研究センター）

スーパーコンピュータの開発にご理解をお願いしたい。

（記録：日本生物物理学会　原田慶恵）

特別講演Ⅱ

司　会：栗原和枝子氏（高分子学会・東北大学）

講演者：相澤益男氏（総合科学技術会議　議員）

「これからの科学・技術と男女共同参画」

相澤益男氏は現在も高分子学会の学会員でもあると、司会の栗原先生から紹介があった。科学技術における国民の期待は大きく、その科学技術と男女共同参画の関わりについて講演して頂いた。

1995 年、科学技術基本法が制定され、1996 年から 2000 年に第 1 期科学技術基本計画、2001 年から 2005 年に第 2 期科学技術基本計画が策定され、この間総合科学技術会議の設置、国立研究機関及び国立大学の法人化がすすめられた。2006 年から第 3 期科学技術基本計画が始まり、最終年度を迎えた。2000 年以降、日本のノーベル賞受賞者 10 名にのぼり、世界的に見て、論文の被引用度トップレベルの研究者が続出している。基礎研究の成功事例として、iPS cell、鉄系超伝導物質の発見があげられる。このような基礎研究の成功は、科学技術への期待、「課題解決」へとつながる。2010 年 6 月に新成長戦略として、強い経済を生み出すために、日本の強みを活かした「グリーンイノベーション」と「ライフイノベーション」に力をいれる。2011 年から第 4 期科学技術基本計画として、我が国はグリーンイノベーションで環境先進国、ライフイノベーションで健康大国を目指す。今後、イノベーションの創出を促す新たな仕組みが必要であり、国民の期待に応え、少子高齢化を解決するためには、今までの分野ごとに別れた研究ではなく、異種分野融合のイノベーションの創出が大切である。

国家を支える新たな強みを生むためには、我が国の科学技術基礎体力の抜本的強化が重要であり、これからの新たな政策展開として、科学技術予算は「未来への投資」して、予算編成プロセスの改革を行なう必要がある。新たな取り組みとして、最先端研究開発支援プログラムや最先端次世代研究開発プログラム（若手 45 歳以下、女性研究者、地域）の創設がある。特に、次世代プログラムの特徴は、分野を越えて課題解決を目指すとともに、女性研究者の活躍を促進することである。

また、多様な人材の育成、確保、活躍の促進が必要であり、特に、女性、外国人、高齢者の活用促進が大切である。しかし、女性研究者数は増加しているが、他国に比べると 13%と少ないのが現状である。女性研究者の採用状況は、理学 11.9%、工学 5.9%、農学 13.6%と保健 34.4%、医学 25.5%、歯学 26.3%、薬学 19.2%に比べて少ない。また、我が国は、女性の学長数が大変少ない。学生の男女比については、理系は 30%で、全体の 40%以上に比べると少なく、さらに博士課程へ進学する女性の数は少ない。問題解決には、女性研究者採用促進であり、国の数値目標を 25%から 30%へ上げ、キャリアパスの構築が必要である。また、先行施策の定着波及には、施策の多様な展開が必要であり、学協会の取り組みに期待している。

（記録：日本植物生理学会　本橋令子）

ポスターセッション

生物科学研究棟 2･3 階ホールにて、ポスターセッションが開催された。以下の表に示すとおり、ワーキンググループの活動報告、加盟学協会の男女共同参画活動の報告（20 件）、文部科学省科学技術振興調整費採択機関の活動報告、(独)科学技術振興機構、(独) 理化学研究所の活動報告（38 件）の発表があり、活発な議論が行われた。

（記録：高分子学会）

加盟学協会	加盟学協・大学・機関	大学・機関
分科会 A(日本分子生物学会、日本植物生理学会)	日本遺伝学会	徳島大学
分科会 B（応用物理学会、日本地球惑星科学連合）	日本建築学会	愛媛大学
分科会 C（日本宇宙生物科学会）	日本金属学会・日本鉄鋼協会	香川大学
研究者のワークライフバランス（WLB）WG	生態工学会	大阪府立大学
女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の調査	東京工業大学	弘前大学
応用物理学会	富山大学	岐阜大学
高分子学会	日本大学	大分大学
電子情報通信学会	宮崎大学	京都大学
日本化学会	慶應義塾大学	九州大学
日本女性科学者の会	津田塾大学	東京農工大学
日本生化学会	新潟大学	東北大学
日本生物物理学会	静岡大学	北海道大学
日本蛋白質科学会	金沢大学	名古屋大学
日本動物学会	上智大学	千葉大学
日本発生生物学会	筑波大学	広島大学
日本物理学会	東邦大学	熊本大学
日本分子生物学会	山形大学	東京大学
日本結晶学会	岡山大学	奈良女子大学
日本地球惑星科学連合	東京都市大学	神戸大学
日本繁殖生物学会	農業環境技術研究所	科学技術振興機構
錯体化学会	岩手大学	理化学研究所

社団法人 応用物理学会
人材育成・男女共同参画委員会

全体会議Ⅱ

パネルディスカッション

「男女共同参画のこれから」

司　会：前田瑞夫氏（高分子学会・理化学研究所）

パネリスト：

本間美和子氏（日本分子生物学会・福島県立医科大　分科会 A・WG4 世話役代表）

高井まどか氏（応用物理学会・東京大学　分科会 B・WG1 世話役代表）

跡見順子氏（日本宇宙生物科学会・東京大学　分科会 C・WG3 世話役代表）

佐藤恵氏（日本動物学会・日本大学　WG2 世話役代表）

板倉明子氏（日本女性科学者の会・物質・材料研究機構　WG6 世話役代表）

原田慶恵氏（日本生物物理学会・京都大学　WG5 世話役代表）

コメンテータ：田辺恒彰氏（高分子学会・旭化成イーマテリアルズ）

川上伸昭氏（科学技術振興機構・理事）

概　要：第 8 期男女共同参画学協会連絡会から以下の 6 つのワーキンググループが発足し、コア学会に協力する複数の学会が協調してこの半年間余、それぞれのワーキンググループのテーマに関して活動しています。今年度の学協会シンポジウムでは、3 つのワーキンググループが分科会を担当することになりました。本パネル討論では、それぞれの分科会の代表者がパネリストとなり、まず、分科会を担当した 3 つのワーキンググループ（WG1, WG3, WG4）による分科会報告があり、次に、他のワーキンググループ活動の中間報告が行なわれました。そして、コメンテータの田辺氏から旭化成の男女共同参画の活動についてお話して頂き、企業の視点から本シンポジウムに対してご意見を頂きました。川上氏からは政府の取り組みについての報告や今後の取り組み方について意見がありました。すべてのパネリストとコメンテータが一人約 5 分から 10 分ほど話したのち、残りの時間で会場からの質問にパネラーの方が回答して、本パネル討論は終了致しました。

6 つのワーキンググループのテーマとコア学会

WG1：女性リーダー育成・若手育成（応用物理学会）

WG2：研究者のワークライフバランス（日本動物学会）

WG3：「自分自身を知る科学」（日本宇宙生物科学会）

WG4：学会を含むリーダーシップ活動の機会均等（日本分子生物学会）

WG5：第 2 回大規模アンケートフォローアップ：生物系の学協会のアンケート結果についての詳細な解析（日本生物物理学会）

WG6：女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の調査（日本女性科学者の会）

分科会 A(WG4 担当)，B（WG１担当)、C（WG3 担当）に関する報告に関しては、各報告書を見て頂ければと思います。それ以外 3 つのワーキンググループからは以下のような報告がありました。

板倉明子氏から：

WG6 では、女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の調査（資料集 18 ページ）に関する活動をしており、この活動の中間報告がありました。女性を増やす政策は日本だけでなく海外でも多く行われており、うまくいっているものとうまくいっていないものがあるというお話がありました。ＷＧ６の目的は、これらを調査して日本がどういう取り組みを行うのが効果的かを考えることであるということでした。特に、北欧とか北米などの経済状況、生活状況が近い国に関してのデータを調べていきたいとのことでした。お話の中で、国際会議等では、子供を連れてきたりする女性研究者を大勢見るようになり、メジャーになってきたが、日本の女性は少なく、女性研究者の割合も日本は少ないことを述べられ、女性の割合の上昇率も少ししか増えない事が指摘されました。

本活動の中間報告として、この上昇率が世界標準に比べてどれくらい良いかを他国と比較した結果について報告がありました。EU 諸国，アメリカ、中国、韓国のデータがあり、適当なデータをピックアップしたとのことでした。日本より上昇率が上の国はアメリカなどで、この理由をもう少し調べていきたいとのことでした。一方、中国は上昇率が下がっており、これは、経済が良くなってきて企業に流れた結果であるとのことでした。また、ドイツは急に下がっており、さらにＥＵでも下がっている国々があるので、これらの国に関しては今後政策や国の状況を調べてみたいとのことでした。これまでの調査において、日本の上昇率はそれほど悪くないということでした。ですが、目標値と上昇率のグラフから、まだ上昇率の値は小さく、今後、上がっていくだろうという指摘がありました。アメリカは急に女性の割合が上がったので、何があったのか調べて、できればアメリカで行っている政策を日本でできないかを考えたいとのことでした。最後に、いろいろなデータを調べたいので、データの情報があったら教えて頂きたいとのことでした。

原田慶恵氏と佐藤恵氏から：

WG2 と WG5 共同の中間活動報告がありました。はじめに、原田氏から研究者のワークライフバランスについて考えていきたいとお話がありました。ポストや研究費の獲得には業績の質と量が必要であり、これには長時間労働が必要であると思ってしまっているが、研究パフォーマンスを支える環境支援の方策が必要ではないかと指摘がありました。これらに関して、まず、2007 年に行われた「科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査」から WLB に関するデータを再度詳しく解析し、WLB に関する実態を把握していきたいと本報告の主旨が述べられました。本報告では、特に研究時間についての解析結果について述べられました（詳しくは第 8 回男女共

同参画学協会連絡会シンポジウムの資料集 10 ページから 17 ページに結果が記載されています)。解析にはＷＧメンバーが所属する 3 学会(日本動物学会、日本生物物理学会と日本物理学会)の会員からの回答データを用いたとのことです。データの性質は、女性比率は、日本動物学会は高く、日本物理学会は低く、日本生物物理学会は中間で、また、一般会員の女性比率と学生会員のそれとの比はどの学会も 2 倍前後と共通しているとお話がありました。

報告者が佐藤氏に代わり、男女差、未婚既婚、子供あるなし別で、在職場時間と自宅仕事時間、これらを合わせた総仕事時間についての解析結果について報告がありました（資料集の 15 ページの図 10 に関するもの)。総時間に関しては 2 つの時間（67 時間ラインと 58 時間ライン）に分かれるとのことでした。男性は、子供有り、なし、常勤任期付、常勤任期付なしにかかわらず多少自宅仕事時間が子供有りの男性が増えることはあるが、総仕事時間がだいたい 67 時間ラインにのるという結果でした。一方女性は、全女性平均は 58 時間と 67 時間の真ん中に位置するが、女性配偶者有り、女性子供有りは総仕事時間が 58 時間ラインでした。これらの中でも子供がいる女性は自宅仕事時間を増やして 58 時間ラインを維持していることが分かり、一方、女性子供無しや女性配偶者無しは 67 時間ラインに近いことが分かったとの報告がありました。これらの結果から、女性はさまざまな理由によって仕事時間が少なくなるが、これを自宅での時間を増やすことによって、なんとか研究時間を増やそうとしている実情あるので、もっと働きなさいとするような女性への支援は良くないのではとのご指摘がありました。自宅での時間を減らすのはワークライフバランスのライフの部分を減らすことにもなるとのお話がありました。また、アンケート調査で、育児に参加したり、家の中で分業している 30 代 40 代の男性からいろいろな環境整備をしてもらいたいという意見があり、女性問題ではなくて男性もかかわっていかないといけないと述べられました。最後に、本調査は 3 学会のデータを解析したものであるので、他の協力してくれる学協会が増えると助かりますと述べられました。

田辺恒彰氏から：

この会に参加することになり何を話せば役に立てるか考えられて、企業での取り組みについての他に、実際にご本人が聞いた社員（女性男性含めて）の声や今日のシンポジウムに参加した際に企業の視点から感じたことについてお話して頂きました。

はじめに、旭化成の制度が載っているイントラネット(社員のみアクセス可)の内容についてお話いただきました。このイントラネットには、女性と男性に対しての制度が記載されていて、これは良い点だと思われたそうです。また、このサイト上にハンドブックがあり Q&A も記載されているとのことでした。どの程度他の会社に制度があるか、大学に比べてどうかは分からないですが、制度としては平均ぐらいではないかとのことでした。法律を最低限は守っていて、他 1，2 個は良い点があるとのことでした。制度として、つわり休暇、参前後休暇、育児休暇などや、勤務時間、仕事の内容を変えることができるなどがあるとのお話がありました。また、男性に関して、夜勤や休日労働に関する制度もできているようです。1 つの特徴として、キッズサポートと

いうものがあり、10 歳ぐらいまで育児に関する支援が延長されているとのことでした。これらの制度は、法的に決められたコンプライアンスはきちんとしていて、それ以上の内容としてはキッズサポートであるというお話でした。女性は制度を利用しやすいが、男性は制度があってもなかなか取らないのが実情で、人事側からすればもっととってほしいとのことでした。

次に、社員の声についてお話いただきました。女性、男性、若い人、子供がいる人、これから結婚しようとしている人などいろいろな人に意見を聞かれたとのことです。一般的に他社に入社した人と比較すると制度等結構良いという意見が多かったとのことです。また、これらの制度に関しては、実際は、結婚したときや子供ができたときに一生懸命みるが、彼氏ができるまではあまりこれらのページを見ないという意見も多かったそうです。いろいろな人がいて、男女の問題は制度の問題ではなく夫婦の問題だという人や、ページをみたこともない男の人もいたり（この場合は、男性の理解が必要であるとのことでした。）、逆に奥さんよりも家事をたくさんしている夫もいるとのことでした。若干の問題点としては、制度としてはあるのですが、周りは気にしないが、本人は何で休んでいるんだろうなどと思われているのでは、と思ってしまうことがあるという、制度以外の問題点をご指摘されました。それから、旭化成では男女のことを完璧に制度として確立したのは 1990 年からだというお話もありました。また、大学では一度産休や育休ででるとハンディキャップがあると聞いたが、旭化成にはまったくないというお話でした。研究部門（100 名ぐらい）では、育児休暇などで休んで 2 年ぐらいで戻ってきますが、パートさんも含めて全員が戻られるとのことです。家事と育児は別に考えるのも良いとのお話がありました。家事はお金で買えますが、育児は女性のほうが良いのではという夫婦もいるとのことでした。

会社で問題なのは、転勤や在宅勤務についてだというお話がありました。会社であるかぎり、かならず転勤はあるとの話でした。だいたいは夫に合わせて移動するようです。1 人だけ週末婚の方がいたということでした。また、社内結婚した方で、上司が気を利かせて、夫が九州に転勤になったときに、奥さんも九州に転勤させてもらった方もいらっしゃったとお話がありました。ただ、いろんな温情を受けていると思われているのではとか本人が気にしたようです。ここでも、制度とは別の問題があるとの指摘がありました。在宅勤務についての制度に関しては、機密漏洩や過剰勤務の問題から、企業では難しいとの話がありました。勝手にするしかないとのことでした。

最後に話された内容をまとめられ、男性社員への啓蒙が足りない、入社前の情報源が少ない、職場全体の雰囲気を作る必要がある、転勤、在宅勤務の問題があるとのことでした。また、今日のシンポジウムに参加して、スーパープロフェッサーや女性のトップエリートに関してフォーカスされていると感じられたようです。幅広い女性への活動につなげてほしいとのことでした。また、アカデミヤでの支援の理由として、自己実現の側面と、日本のアカデミー（多様化）の力が低下しているからと聞いたが、産業界、特に担当している材料系では、より総合力の低下が深刻であるとのことでした。ですので、いろいろな場での男女共同参画を進めてほしいと最後にまとめられました。

川上理事から：

第 2 期科学技術基本計画に始めて女性研究者が取り上げられ、早速どういう対応をするかということを考えるために、多くの女性研究者に話を聞きに行った。すると年代によって考えていることも求めていることも非常に違っていて、その原因は、世の中において女性のおかれている状況が大きく変化しているためだと思われたという話がありました。第 3 期になって、数値目標もできて、具体的な支援も充実してきており、社会における変化も激しいが、女性研究者を取り巻く状況も大きく変わってきているので、その時の状況をつかんで、問題点を的確に抽出して必要な対策を提言して頂きたいとのご要望がありました。

その後、JST としてどのような支援をしているかについてお話がありました。まず、女性研究者に関しては、さきがけや CREST での数値目標設定についてお話がありましたが、目標達成に向けた動きは芳しくなく、採用者を増やすにはともかく多くの方に応募をしていただきたいとのことでした。ライフイベントに関する支援に関しては、順調に予算を消化しているとのことでした。女子中高生に関しては、ロールモデルを見せることを行っており、SSH が集まるところに研究者に来て頂いたり、ロールモデル集というパンフレットも作成しているとのことでした。ロールモデル集は女子高生などに講演されるときに使っていただきたく、必要であれば、JST に請求していただければ送りますとのことでした。ただ、ロールモデルが大学の職が中心で、企業など多様な分野の人のロールモデルが少ない点について改善が必要とのことでした。

時間が迫ってきているので、最後に１、2 個の質問を会場から伺って、本セッションは終了しました。質問に関しては以下の質問がありました。

JST 科学技術振興調整室長の塩満氏から：

ここにおられる女性の先生方は、海外で研究した方も多いと思いますが、先進国（3 割以上が女性）と日本の大きな違いをお聞きして参考にしたいとのことでした。

回　答：

板倉氏：ドイツで何度か研究しているとお話があり、若いときの結婚していないときの研究者のあり方が全然違うと回答がありました。若い時や結婚していない時などワークライフバランスをそんなに気にしていない時期に、日本人はすべての時間を研究に費やしていており、ここに女性に関しては、結婚して子供ができたときのライフの問題が直面するとのことでした。日本では、研究者の生活の中心が仕事になっているという特性があり、はじめから余裕がないところに家族の時間が入ってくる。海外の人は若いときにもう少し遊んでいて、余裕があり自分の時間を持っている人が多いので、その時間に家族の時間が入ってくるとのことでした。

本間氏：アメリカの 2 箇所の大学に留学したことがあると述べられ、以下の 2 点の回答がありました。 1 つは研究費のシステムで、たとえば科研費は日本では大学におりてきて、科研費がとれたことイコール PI ではないが、アメリカでは公的グラントをとってくることは研究者としての自立に相応するとのことでした。2 つめは、年齢に対する考え方で、海外ではあまり何歳であるということを気にせず自分の人生を考えている一方、日本では競争的外部資金申請についての年齢枠等の制限があるというご意見でした。

最後は、会場からの大きな拍手でこのパネルディスカッションが終わりました。

各種報告

司　会：前田瑞夫氏（高分子学会・理化学研究所）

連絡会活動報告：

第 8 期連絡会副委員長の吉江尚子氏（高分子学会・東京大学）より第 8 期の活動報告がなされた。

＜要望活動について＞

下記大きく 2 つの要望活動が行われ、全加盟学協会の承認が必要であるにもかかわらず、学協会の総意として提出できたことは皆の思いが一致した結果であった。

・　「科学技術分野での男女共同参画の推進に向けての要望」（平成 21 年 12 月 20 日）

・　第 4 期科学技術基本計画及び第 3 次男女共同参画基本計画への要望「科学技術分野での男女共同参画推進に向けての要望」（平成 22 年 8 月 3 日）

＜ワーキンググループ活動について＞

研究者の男女共同参画に関連する問題・提案・活動の種をボトムアップ的に形成することを目的に、6 つのワーキンググループを立ち上げ取り組んできた。

各グループのタイトルと幹事学会は次のとおりである。

・　女性リーダー育成・若手育成　　応用物理学会

・　研究者のワークライフバランス　　日本動物学会

・　「自分自身を知る科学」を考える　　日本宇宙生物科学会

・　学会を含むリーダーシップ活動の機会均等　　日本分子生物学会

・　第 2 回大規模アンケートフォローアップ：
生物系の学協会のアンケート結果についての詳細な解析
日本生物物理学会

・　女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の調査
日本女性科学者の会

＜協賛・後援について＞

連絡会として、男女共同参画に関するシンポジウムなど、協賛を 4 件、後援を 9 件行った。

＜その他の活動について＞

保育室運営に関する調査、2009 年学協会連絡会女性比率調査を行った。次世代の女性研究者を育てるための活動として、女子中高生のための関西科学塾、女子中高生夏の学校 2010 に協力した。

＜運営委員会について＞

例年は、年間 4 回の開催であるが、今年はワーキンググループ活動があったこともあり 5 回の開催となった。

＜主催行事＞

本連絡会シンポジウムを主催した。

新規加盟学会紹介：

日本魚類学会、日本畜産学会が新規に正式加盟学会となったとの報告があった。

次期連絡会委員長挨拶：

第 9 期連絡会委員長　跡見順子氏（日本宇宙生物学会・東京大学）により、幅広く男女共同参画の問題が立ち上がっている中で多角的なとりくみにより理系の女性の持っている力で手をつなぎ日本のやや煮詰まった現状に新しい風を吹き込めるよう先輩諸学会にならって一歩でも前進したいとの旨の挨拶があった。

閉会の辞：

高分子学会男女共同参画担当副会長　高原　淳氏（九州大学）より、分科会、特別講演、ポスター、パネルディスカッションなどそれぞれ有意義であった旨の挨拶があり、高分子学会独自の特徴ある取り組みである「再チャレンジ会員制度」などの簡単な紹介があった。主催者、共催者、後援者、来賓などへの謝辞があり、この後の懇親会でもネットワークをつくり、男女共同参画を推進してほしいとの辞をもって締めくくられた。

（記録：日本遺伝学会　高橋　文）